《正岡子規（36）の続き》その276

子規周辺の人びと（二十六）

平岸　三八

漱石は明治39年6月「中学文芸」に発表の「落第」でも米山について書いている。いやしゃべっている。これも談話筆記である。

追試験を受けず、落第をして勉強をしなおして、それが後来非常に為になったと語っている。もし落第をせずに、ずるずると予備門を誤魔化して通ったら今頃どんな者になっていたか知れないと思うと云っている。

前にはできなかった数学なども非常に分かるようになり、クラスメートなども夏目は理科に行くのだろうと思っていたくらいで、自分でも食いっぱぐれのない建築家になって、人に頭を下げずに、美術的なことのできる仕事をしたいと思うようになっていた。

ところが同じ級に米山という文学士になって死んだ男が居た。非常な秀才で、僕は大分懇意にしていた。それが云うには、君は建築をやるというが、今の日本で君の思っている様な美術的な建築をして後代に遺すなどということは迚も不可能だ。それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年、幾千年の後に伝えるような大作が出来るではないかと云うのだ。

僕の建築科を選んだのは、自分一身の利害から打算したのだが、米山の論は天下を標準としているのだ。成程そうだと思われるので。又決心をし直して、文学をやることに定め、国文や漢文をなら別に研究する必要もないような気がして、英文学を専攻することにした。その後は変化もなく、今日までやってきたが、やってみれば、あまり面白くもないので、此頃はまた商売替をしたいと思うけれど、今ぢゃもう仕方がない。初めは随分突飛なことを考えていたもので、英文学を研究して英文で大文学を書こうなどと考えていたんだったが……。

わずか29歳で若死した天然居士の墓碑が、東京駒込蓬莱町の養源寺にあって、台座を併せて高さが6尺（約一八〇センチ）もあると森銑三著『森　銑三遺珠1』（平成8年10月11日　研文社発行　編者　小出昌洋）に教えられた。碑文は重野成斎、文字は巖谷一六が書しているとあるから、文も字も大家の筆になるのである。

こんな立派な墓を誰が建てたものかは、同書に書いてないので分からない。重野成斎は、米山の大学の先生であり、巖谷一六は当時有名な書家である。

篆額は横に一行に「米山保三郎墓銘」としてあり、その下に縦に碑文が書かれている。

文学士米山保三郎歿、其友人持狀、来請銘墓、予往為文科大学教授、保三郎適在学、誼不可辞、乃按狀序之曰、保三郎加賀金沢人、父曰専造、母石川氏、其第二子也、生穎異、好学、年十六、来東京、歴高等中学、入文科大学、修哲学、既卒業、乃入大学院、研究空間論、不幸寢疫一月、遂不起、明治三十年五月二十九日也、享年二十有九、未不娶無子、葬駒籠養源寺、保三郎性剛直、不拘乎物、而其修業、気専思深、寢饋倶廃、有所持、雖死不枉、夙攻和漢学、旁通佛典、其在中学、研鑽英文、尋渉猟独仏学、又精算数、平素用心於倫理道徳常懐魯論、起居動作不離身、（以下三百六字略）

明治三十一年五月

正四位勲四等文学博士　重野安繹撰文

正四位勲四等　　巖谷修書並篆額

重野安繹（号成斎）は、米山の大学での先生になるのである。もし墓銘を漱石が書いたものであったなら、この墓はもっともっと多くの人の注目するところであったろう。

もっともこの墓を建てたときは、漱石はまだ旧制第五高等学校の教授に過ぎず、まだ文名を為していないので、碑文の依頼もなかったものと思われる。いくら親友といっても、世間知名の人物でなければ、漢文に造詣の深かった漱石でも書く訳にはいかない。